

「わしじゃない。天地にちかってわしじゃない。」
からだじゅうからしぼり出すような声の中で村人は目をぎらつかせ、土手に穴を掘り庄衛をけ
おとしてうめてしまいました。
村人たちはたがいにえたいの知れないものにおびえながら、とっくに暮れた闇の中へちっ
きました。

やがて一年の月日が流れ、庄衛を生きうめにした日が来しました。どうしたものかあちこちの家
では村人が高い熱にうなされ、もだえ苦しんで米のとき汁のようなものを出して死んでいったの
です。

村人たちはたれいとうとなく、

「おそがいことや、庄衛のたたりにちがいない。」

そう言い合っておののきました。そして、この先こうしたことのないように、庄衛を生きうめ
にしたところに石の五輪塔を建て、庄衛の冥福を祈りました。

そののちも、この根本村の人たちは一ヶ月に一日、庄衛の命日として仕事を休み、庄衛の霊を
なくさめたということです。

飯田 美智子

わらじと赤ざや



わらじと赤ざや

慶長十八年、関が原合戦の終わったばかりのころだった。

脇郷（今の平和町）の庄屋半兵衛は釣りが大好きで何よりも楽しみにしていた。

きょうも茶羽織をひっかけ、脇差を腰にした半兵衛は、土岐川と笠原川の出合いで釣りはじめた。

つきつきにかかるものに気をよくしていると、向こう岸の土手に見えない二人の侍が現われた。

侍たちは、半兵衛の竿先をザブ、ザブとむぞうさに横ぎり川を渡ると立ちさろうとした。

むっとした半兵衛は大声でよびとめた。

「釣りをしている竿先を横ぎるとは何事だ。無礼であろうが。」

足をとめた二人の侍は、半兵衛を百姓と見てあなどったのか、

「何を、この土百姓めが。」

と、同時に刀を抜いて斬りかかろうとした。

半兵衛は釣り竿をそのまま槍のように身がまえた。

「百姓とはいえ、おれも郷士や。切れるものなら切ってみよ。」

二人の侍はどちらも二十を越したばかりの年ごろで、二人ともたいした腕まえでないことは半兵衛にもすぐ見やぶられた。竹竿ではあるが、しっかと身がまえた半兵衛には一寸のすきもなかった。

しばらくの見合いのすえ、細身の侍が、がくつとひざを折ると、つれの大男もどさつとしりをついた。

「おれたちは、関が原の落武者で、敵のせんさくを逃れて国へ帰る途中やが、三日も食わずで腹がへってどうにもならん。どうか助けてもらいたい。」

やせた方の侍は、あえぎあえぎそういった。

「そうか、それなら助けてやろう。おれの家にくるがよい。」

半兵衛は侍たちを家につれ帰ると、まず風呂に入れ、取ってきた魚を焼いて膳にそえて飯を食べさせた。

二人は出された飯を息もつがずにむさぼった。あんどんの光が二人のつかれはてた顔を照らすと、負け戦の苦しみが影のように見られた。

「おまえたちは百姓になる気はないかのう。」

と半兵衛が聞くと、

「国へ帰ってみても、つき出されて首をきられるのがおちや。おれたちはまだ若い、死にとうな

い。助けてもらえるなら百姓になってもよい。

一人がいうと、もう一人もうなずいた。

「そうか、それならおれにまかせておけ。」

半兵衛は奥の部屋から、紙と矢立をとってくると、一連の詩を書いて侍たちに読ませた。

青白い顔のやせた方の侍は、すらすらとそれを讀んだが、大男の方はとまどった顔をした。

「おれは学問がないで……。」

半兵衛は、

「そうか、よしまつた。」

と、うなずくと、森田と名のるやせた方の侍に、

「あなたはなかなかの学者や、お宮（多度神社）の宮司となってくれ、この村で子孫の末までめ

んどうを見よう。」

大男の方には

「あなたはあすきめよう。」

そういって二人をその夜は泊めた。

翌朝、二人が起きたころには半兵衛の姿がみえなかったが、朝飯どきに外出から戻ってきて

「よかった、よかった。これできました。」

と大男の侍にむかっていった。

「あなたをあずかってくれるところをきめてきた。」

こうして大男は、本郷の名主のところへ引きとらせ、森田を宮司にきめると、子孫の末まで宮司とすることを書いた書状に、

「美野国多治見村字臨郷、庄屋水野半兵衛」

と署名して手渡した。

森田氏はそれから、十五代にわたって多度神社の宮司をつとめた。また二人の子孫は、毎年正月になると、森田氏は臨郷にたどりついた日のわらじを、大男の方は、そのときに身にかけていた赤ざやの刀を、それぞれ三宝にのせて床の間にまつり、先祖の労苦をしのぶとともに、半兵衛の徳をしたったという。